

# 「地域家族食堂」 ～家庭における愛情機能を取り戻すために～

井立田 昌汰<sup>1</sup>・遠藤 雅治<sup>2</sup>・山城 裕孝<sup>3</sup>

<sup>1</sup>熊本大学 理学部 理学科 数学コース 3年生

<sup>2</sup>熊本大学 理学部 理学科 生物コース 4年生

<sup>3</sup>崇城大学 生物生命学部 応用微生物工学科 4年生

日本では、3組に1組が離婚しており、家庭内別居なども年々増加している。そんな中、精神的に不安定な生活を余儀なくされ、虐待や子どもの暴力行為などの事件が急増している。これらの原因の一つに家庭の愛情機能の低下があげられる。よって、私たちは家庭の愛情機能を向上させることを通して、家庭内の様々な問題を解決したいと考えた。

そこで提案する政策が「地域家族食堂」である。この政策は、子どもの貧困をきっかけに、全国で広まっている活動である「子ども食堂」に、家庭の愛情機能の向上という観点から、地域の高齢者や専業主婦、大学生の参加によって三世代家族のような地域コミュニティをつくろうとするものである。

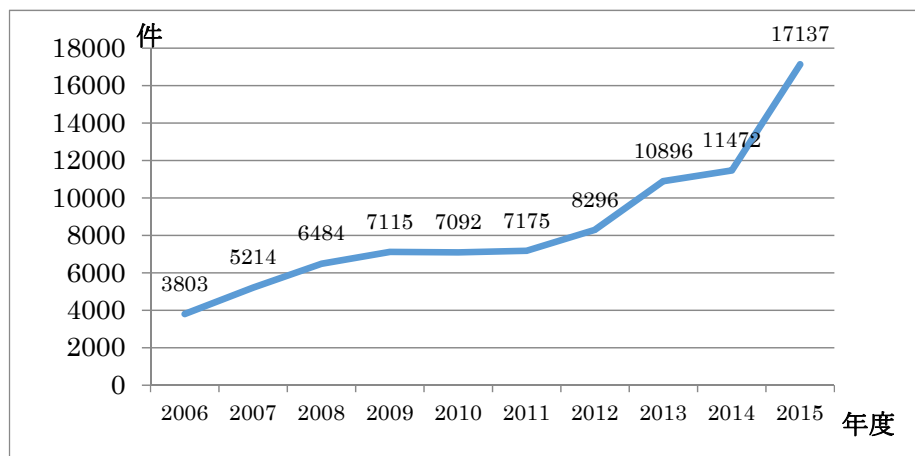
第三者が介入しにくい家庭内の問題を、「地域家族食堂」による地域のつながりによって解決し、地域全体が一つの家族となって子どもたちを教育することによって、健全な子どもたちを育成していきたい。

## 1. 政策提案の背景

### (1) 小学生の暴力行為の増加

小学生による暴力行為が年々増加傾向にある。2006年から2015年の9年間で約4倍に増え、過去最多となっている。

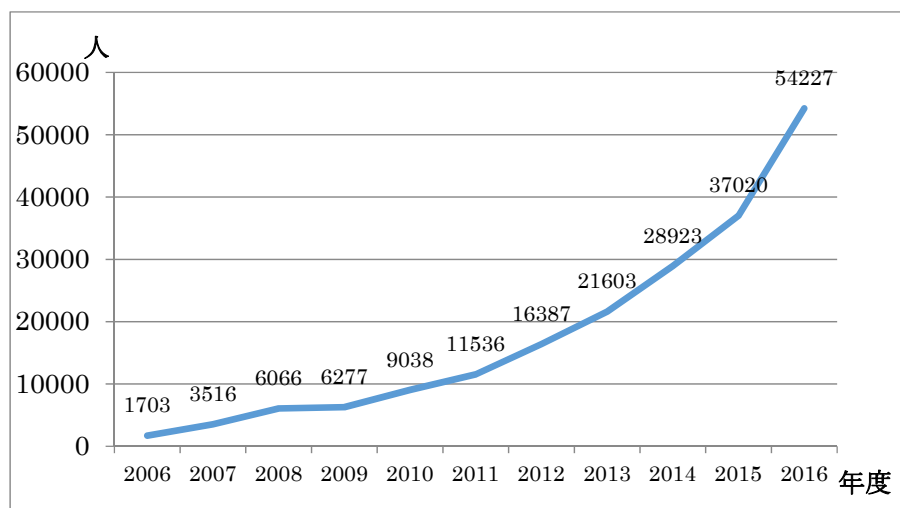
図-1 小学校における学校内外の暴力行為発生件数の推移<sup>1)</sup>



## (2) 児童虐待件数の増加

警察が介入する深刻な児童虐待が急増しており、警察が児童相談所に通告した件数は、2016年に約54000件(前年比45%増)と12年連続で増加し、過去最高となった(図-2)。最も多かったのが「心理的虐待」で約65%となっており、そのうち、親が子どもの前で配偶者やパートナーに暴力を振るう「面前DV」が約70%という結果が現れている。

図-2 小学校における児童虐待通告児童数<sup>2)</sup>



## 2. 政策提案によって解決したい課題

子どもの暴力行為の原因の一つに「家庭の愛情機能の低下」があると考えた。夫婦間のトラブルや不和によって、父親や母親から本来受けるはずの愛情を受けることができずに、家庭の愛情機能が低下し、子どものストレスが家庭内で解消されていないのではないかと考えた。よって本政策によって「家庭の愛情機能の低下」という課題を解決していきたい。

## 3. 課題解決策の特徴、重要性、有効性

### (1) 特徴

最大の特徴は家庭の問題を地域のつながりで解決する点である。他の政策では家庭の問題に第三者が入りにくいのが問題点であり、問題が生じてからしか警察や行政機関が対応することができない。未然に防止することが難しかった家庭の問題に対し、地域のつながりによって解決することを目指した点が本政策の特徴である。

## (2) 重要性

虐待や子どもの暴力行為を放置してしまえば、重大な犯罪や事件にもつながりかねない。また、その子どもたちが将来家庭を築いたときにも、同じような問題が生じることが予想され、負の連鎖に歯止めがかからない。したがって、この問題はいち早く解決すべき問題である。

## (3) 有効性

### a) 地域全体で子どもたちを教育する文化

子ども食堂によって、共働き等で親の帰りが遅くどうしても面倒を見ることのできない子どもたちを地域が家族のように面倒を見ることのできる。また、親同士のつながりができることで、育児の悩みや家庭の問題をよりオープンに相談し合う場ができる。

### b) 理想的な家庭モデルの提示

現在行われている子ども食堂では、子どもが家事の手伝いや高齢者の方との交流を通して、家庭のあり方を学ぶことができる。その家庭のあり方を学んだ子どもたちが、自分の家庭の中で実践していくことを通して家庭環境の改善につながる。

## 4. 「子ども食堂」の実地調査

### (1) 「子ども食堂」の概要

「子ども食堂」とは、経済的な事情などにより、家庭で十分な食事がとれない子どもに、無料もしくは安価な食事や居場所を提供する活動。民間発の取り組みで、2012年には「子ども食堂」の名前が使われ始め、朝日新聞の調査によると、2016年5月末で少なくとも全国に319カ所ある。<sup>3)</sup>

### (2) 「子ども食堂」への実地調査

今回は熊本市内 12 団体の中でも、若葉コミュニティセンターで活動している任意団体「逢桜（あいら）の里」が行っている子ども食堂の様子を調査した。

#### a) 実地調査内容

2017年6月、熊本市東区のコミュニティセンターで行われていた子ども食堂を見学した。15時頃から高齢者の方が10名程来られて、食事作りの手伝いと食事を行っていた。そして、16時頃から小学生が8名程来ていた。小学生は、子ども食堂に来ると、「おじいちゃんたちの肩を3人揉む」や「窓拭きをする」など何か一つお手伝いをするようになっていた。その中で、子どもたちは少し緊張しながらではあったが、高齢者の方々と交流をしたり、子どもたち同士で楽しく話していた。また、参加されていたある高齢者の方は「一人暮らしだからこの食堂がある日をいつも楽しみにしている。お話をしながら料理や食事をするのが楽しい。」と話していた。食事が終わって、みんなで歌を歌ったり、お手伝いをする様子が家族のような親しみを感じる空間であった。食事料金は無料で、場所が小学校に

隣接しているため、入って来やすい雰囲気だと感じた。

写真-1 子どもたちがお手伝いしている様子



#### b) 実地調査で見えた課題

子どもと高齢者の利用時間帯がずれているため、高齢者の方との交流ができないことがある。また、当日は2名のスタッフで対応していたが、とても忙しそうに動いていて、子どもたちと話す時間がなかなか取れていないと感じた。

### 5. 解決策の内容

今回提案する「地域家族食堂」は、従来の「子ども食堂」に(1)行政による経済支援、(2)多様な世代の参加、(3)大学生の協力を加えた政策である。

#### (1) 行政による経済支援

全国で初めて制定された「くまもと家庭教育支援条例」を基に、家庭教育を担当する熊本市役所の社会教育課が経済的な支援と定期的な情報共有の場を開催する。施設の利用料金や食材代などの子ども食堂の経営に最低限必要な資金を支援する。また、子ども食堂の自立的な運営をサポートするため、情報交換の場としてのセミナーを開催する。現在は「こども食堂ネットワーク」という全国の子ども食堂同士のコミュニティがあるがそれを行政がバックアップするような形になる。こうした支援によって、持続可能な運営を目指す。

#### (2) 多様な世代の参加

一人暮らしの高齢者の方や専業主婦の方、近くの大学生など様々な世代が参加することで、そこに三世代家族のような文化ができ、子どもたちの健全な育成につながる。実地調査でも耳にしたが、皿洗いだけでも何か手伝えることがあれば手伝いたい、という高齢者や主婦の方は少なくない。こうした多様な世代が集うことによって、核家族化が進んだ現代に、家庭の愛情機能的部分を補うことができるのではないだろうか。

#### (3) 大学生の協力

大学生がボランティアで子どもたちの話し相手や勉強を教えてあげる。大学生は、

一人暮らしで偏った食事を一人でとっていることが少なくない。そこで、そんな大学生に対しても食事を提供し、子ども食堂の手伝いをしてもらう。また、大学生が来て勉強を教えてくれるとなれば、多くの保護者が地域家族食堂に行かせたくなるのではないだろうか。そして、募集の仕方としては、まず子ども食堂にボランティアに行きたい学生を募る。そして集まった大学生を登録し、それを熊本市役所の社会教育課に申請する。この仕組みに関しては、熊本大学の教育学部が行う「ユア・フレンド事業」のシステムを適用する。「ユア・フレンド事業」とは週1～2日ほど、不登校の子どもに大学生が訪問し、話を聞くボランティアである。登録した大学生が各自の予定と訪問先の予定の合う日に訪問することができるようになっている。それを先行事例として、同じようなシステムを、子ども食堂にも展開する。

## 参考文献

- 1) 平成 27 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」、文部科学省初等中等教育局児童生徒課
- 2) 「平成 28 年における少年非行、児童虐待及び児童の性的搾取等の状況について」、警察庁生活安全局少年課
- 3) 2016 年 8 月 20 日付 朝日新聞 朝刊 京都市内